

【翻訳】

## 洪命憲と洪起文

姜 玲 珠

波田野 節子・訳

Hong Myong-hi and Hong Gi-mun  
Kang Yong-ju (Professor of Sang-myong University)

Translated by Setsuko HATANO

本稿は2004年12月17日に早稲田大学で開催された2004年度第3回朝鮮文化研究会において、姜玲珠氏（祥明大学教授）がおこなった講演の日本語翻訳である。姜玲珠氏は韓国における洪命憲研究の第一人者であり、波田野が科研費補助金（基盤研究C）を受けて行っている研究の協力者として、2004年12月16日から19日まで現地踏査のために来日した。

### 1. きわめて特殊な父子、洪命憲と洪起文

筆者はながらく碧初洪命憲と『林巨正』に関する研究を続け、『碧初洪命憲研究』と『碧初洪命憲評伝』を刊行した。最近洪命憲の長男洪起文に関する研究に着手し、洪起文の生涯の初期をあつかった論文「国学者洪起文」を発表した<sup>1</sup>。

洪命憲はさまざまな意味で興味深い人物だが、とりわけ注目されるのは洪命憲—洪起文—洪錫中とつづく彼の独特な家族史である。よく知られているように、洪命憲（1888～1968）は歴史小説『林巨正』の作者であり、かつ当時有数の漢学者として知られた人物であった。彼の長男である袋山洪起文（1903～1992）は韓国の

語学・文学・史学の分野にわたって多くの著述を残し、末年には北朝鮮が国家的な事業として推進した『李朝実録』（『朝鮮王朝実録』）の翻訳を主導した国学者である。洪起文の息子である洪錫中（1941～）は現在北朝鮮で作家として活躍しており、この夏には彼の歴史小説『黄真伊』が北の作家として初めて韓国の文学賞（創批社で主管する萬海文学賞）を受賞して話題となった。

そのうえ、この三人ともに特に言語への関心と造詣が深く、『林巨正』の作家洪命憲と国学者である洪起文は言うまでもないが、洪錫中もまた、韓国・北朝鮮を通して今日の作家としては例がないほど豊富で多彩な語彙を駆使して高い評価を受けている<sup>2</sup>。

筆者の「国学者洪起文研究」が掲載された『歴史批評』2004年秋号には、表紙のデザインとして特別に洪命憲・洪起文・洪錫中三代の写真が使われている。韓国のことわざに「三代大臣が続くことはなく、三代乞食が続くこともない」とあるように、韓国現代史でこのように三代つづいて文人・学者として著名な人物になり、そのうえ「家学」を継いだかのように知的・精神的世界の連続性を示している例は見出せない。

ここでは洪命憲と彼の長男である袋山洪起文

がいかなる父子関係を持ち、たがいどんな影響を与えあったのか、また知識人としてどんな共通点と差異点を持っていたのかを考察する。そして、この父子のようなタイプの知識人が韓国の近代知性史においていかなる位相にあるのかを考えてみたいと思う。

## 2. 家門と出生

洪命憲は1888年、名門兩班である豊山洪氏家門の嫡子として生まれた。曾祖父洪祐吉は吏曹判書、祖父の洪承穆は兵曹参判を務め、洪命憲の父洪範植は、錦山郡守をしていた1910年に韓国が日本の植民地に転落するや悲憤のあまり自決した殉国烈士として有名である。

洪命憲が生まれたのは忠清北道の小さな村、槐山である。洪命憲の曾祖父洪祐吉は兩班の居住地であるソウルの北村にも大邸宅を所有していたが、1860年頃、老後のために別途槐山の仁山里にあった大きな屋敷を購入した。それで洪命憲は槐山の仁山里で生まれて、そこで幼児期を過ごした<sup>3</sup>。仁山里の屋敷には曾祖母をはじめと数十名の大家族が住んでおり、洪命憲は朝鮮時代の兩班家庭そのままの伝統的な雰囲気を経験しながら成長した。

洪命憲はその時代の兩班家庭の慣習にしたがって、満12歳のとき、3歳年上の兩班家門の閔秀、閔スニョンと早婚した。そして洪命憲が満15歳になった1903年、長男起文が生まれた。起文が生まれると、満32歳の若年で祖父となった洪範植は息子命憲に書を与え、「まだ事理をわきまえぬとはいえ、お前もはや息子をもつ身である（雖曰無知亦既抱子）」と訓戒したという。後日、洪起文が国語学者となり『朝鮮文法研究』を刊行したとき、洪命憲はその序文を「私と起文は15、6歳しか違ってない、いってみれば、兄弟のような父子である」と書き出して、父親の手紙のこの一節を引用している<sup>4</sup>。

洪起文は「息子から見た父」という文章で自分の幼年時代を次のように回想している。

幼な心に残る父の記憶はひどくぼんやりとしている。そのうえ、めったに会えないわりには、会うたびに小言を聞かされ罰を受けるので、洪

してよい父親という記憶ではなかった。考えて見れば当然の話で、十六歳で私をなした父にとっては、その年で息子を可愛がるのも難しかっただろうし、大家族で旧式な家庭にあっては息子を可愛がるどころか、抱いたり撫でたりするのもはばかられたことであろう。（…）

「曾々おばあちゃんも、曾おじいちゃんも、おばあちゃんやお母さんも、家族みんなが僕を大好きなのに、父さんだけがどうして僕のことを嫌うんだろう」

これが幼い私にとっての大疑問であった。

「お父様はお前を憎く思って、ああするわけじゃないんだよ」

耳がたいそう大きくてあつぽたい曾々祖母、その耳のように人情にもあつい曾々祖母は、私が父から叱られたり罰を受けたりするたびに、私を膝に乗せて背中を撫でながらこう言ったが、これくらいの言葉では私の疑問は解けなかった<sup>5</sup>。

このように、大家族の家庭で若年にして父となった洪命憲は、起文が幼いときには叱ったり罰を与える厳父として君臨したが、起文が成長したのちは破格なまでにへだたりのない間柄の父子として過ごした。それでこの親子は、「倫理的には父子であるが情的には友人のようで、おたがいに忌憚なく何でも話しあい、タバコはいっしょに吸うだけでなく、切れたときには融通しあう」ことが世間話の種となった<sup>6</sup>。このために洪命憲はソウル北村の頑迷な兩班たちから「軽い」とか「兩班の体面を傷つける」などの非難も受けた。

1888年生まれで洪命憲は李光洙より4歳上で、韓国近代小説家としてはもっとも初期に生まれた人物であった<sup>7</sup>。開化期文学をのぞく韓国近現代文学史に登場する人物で洪命憲より年長の文人は、9歳上の詩人韓龍雲くらいである。これほどに洪命憲の世代には新文学と近代思想の洗礼を本格的に受けた人物は少なかった。

一方、洪起文は1903年生まれで、同年輩に多くの文人、学者、社会運動家がいる。たとえば朴英熙、崔曙海、韓雪野、沈熹、安夕影と詩人の李相和・金東煥が洪起文より2歳上で1901年生まれ、作家羅稻香、蔡萬植と詩人の

金素月が1歳上で1902年生まれであった。そして批評家の金基鎮、梁柱東と詩人の鄭芝溶・李殷相が洪起文と同年で1903年生まれ、作家の李泰俊と詩人李陸史が1歳年下で1904年生まれである。学者では国文学者趙潤済が洪起文より1歳下の1904年生まれ、国文学者金台俊と国語学者方鍾鉉が2歳年下で1905年生まれだった。社会主義運動家としては朴憲永が1900年生まれ、許貞淑が1902年生まれである。

それで洪起文にとっては、父親だけでなく父親の友人たちも学問的には師匠であり、社会活動の場においては力強い後援者であった。一方、洪命憲は息子の「竹馬の友」である沈熏の『常緑樹』に書いた序文で「沈熏は私の弟のような友人」と表現し、洪起文も「沈君（沈熏—引用者）も私の父をたいそう慕っていたが、沈君に対する私の父の情も決して小さくはなかった」と述懐している<sup>8</sup>。このように、洪命憲は弟のような年輩であった長男を介して新世代の文人・学者・社会運動家たちと友人のように近しく交わり、なによりも息子起文とへだたりなく付き合い合ったおかげで、彼の世代の人間としては比類がないほど進取的な思考の所有者になることができたと思われる。

### 3. 成長と修学

先に述べたように洪命憲は槐山で生まれ、幼年時代から漢学を修めた。そして満13歳であった1901年に上京して、翌年から1905年までソウルの中橋義塾で新学問を勉強した。今日の初等学校課程にあたる中橋義塾で、彼は算術、物理、歴史、法学など初等の水準の近代学問を学び、日語科を選択してとくに日本語を重点的に学んだ。

中橋義塾を卒業した翌年の1906年、洪命憲は日本に留学する。東京ではまず東洋商業学校に補欠入学してから翌年学校をかえて、大成中学校を卒業した<sup>9</sup>。洪命憲は留学の初期は熱心に勉強したが、その後しだいに読書に耽溺し、頻繁に欠席して勉強も真面目でなかった。にもかかわらず席次はつねに1等か2等で、成績は良かった。この留学生時代に彼は崔南善と李光洙など、のちに韓国現代文学史に足跡を残すこ

とになる人物たちと深い交友を結び、その一方で広範な読書を通じて、西洋と日本の近代文学と思想を積極的に受け入れた。

1910年に学業を中断して帰国した洪命憲は、韓国が日本の植民地に転落すると、海外で独立運動をするために、1912年末、ふたたび国を離れて中国に行った。上海で彼は、申圭植、朴殷植、申采浩などとともに独立運動団体である同済社で活動した。その後は独立運動の財政基盤を築くつもりで南洋に向かい、シンガポールで数年間活動してから、30歳になった1918年に帰国した。

このように、地方の両班の嫡男として生まれて漢学を修めた洪命憲は、その時代の人物としては例外的に、ソウルと東京で体系的な学校教育を受けて新学問を正式に学んだ。そのうえ彼は十代の初めから二十代にかけて、ソウル・東京・上海・シンガポールなど、当時、東洋では屈指の大都会であり、アジアにおける現代文明の先端地域で生活しながら、二十世紀の新文物を幅広く体験した。したがって洪命憲がその世代の人間としては例外的なほど、西洋的で近代的な文物と思潮を受容して進取的な意識と姿勢をもつようになったことには、若い時代に新教育を受けて海外で生活した経験が大きく作用していると考えられる。

洪起文は、洪命憲が中橋義塾に在学中にソウルで生まれて成長した。しかし1910年、7歳のとき、韓国が日本の植民地に転落して祖父の洪範植が殉国すると、家族とともに都を離れ、槐山で少年時代を送ることになった。そのうえ父の洪命憲は、日本の支配下で子供たちに植民地教育を受けさせることはできないという信条を持っていたために、ちょうど学齢期に達した洪起文は学校に入学できないまま、曾祖父の指導を受けながら家で漢文の勉強だけをするようになった<sup>10</sup>。

1918年、父の洪命憲が中国と南洋での放浪生活を終えて帰国すると、洪起文は初めて父から国際情勢と朝鮮の現実に関する話を聞き、新学問を教えてもらった。そして翌年、洪命憲が3・1運動で投獄されると、洪起文は父の資料の山から偶然アルフォンス・ドーデ(A. Daudet)の「最後の授業」<sup>11</sup>の翻訳原稿を発見して読み、

大きな感銘を受けて国語（韓国語）研究を始めることになった。

学校教育を受けることができず、新学問の基礎はもちろん日本語すら学べなかつた洪起文は、父の蔵書と格闘しながらきわめて困難な独学の過程を踏まねばならなかつた。しかし洪命憲は出獄すると師となって起文に新旧学問を指導してくれた。のみならず、洪起文は、父の親友である漢学者鄭寅普とスイスのチューリッヒ大学哲学博士である李灌銘から、高いレベルの漢学と新学問を教えてもらうことができた。このように当時の最高レベルの学者たちを「指導教授」として勉強することができたのは、洪命憲も望めなかつた僥倖であつた。

言語学を本格的に学ぼうと思つた洪起文は、おそまきながら海外留学に出て、1922年から約2年を中国、1925年から約2年を日本で留学生活を送つた。しかし、国内での学歴がまったくないまま相当な学問的水準にあつた彼が、彼の期待に沿うような学校に正式に入学することは、中国でも日本でもほとんど不可能に近かつたのであろう。そのうえ上海と東京に留学中に近代ナショナリズム（民族主義）をへて社会主義思想に夢中になつたため、勉強に専念することはますます難しかつた。現在韓国で出ている人名事典などにはよく洪起文の学歴が「日本で大学卒業」あるいは「日本大学卒業」と記載されているが、「漢文修学、海外にて自習」という1940年『朝光』誌の記録が正確だとと思われる<sup>12</sup>。

時代の変化の中心地であるソウル北村で生まれた洪起文は、槐山で生まれてソウルに留学した父親とは正反対に、植民地近代化という新しい時代の変化に逆行するかのようになり、ソウルを離れて田舎の槐山に行つて成長した。のみならず、父は新教育の草創期において当時の両班出身としては例外的にソウルで新式の学校に通つたが、次世代の洪起文は逆に新教育を受けることができなかった。しかし洪起文はおそまきながら独学で新学問を学び、国語研究に志を立てて邁進した。そのうえ、洪命憲、鄭寅普、李灌銘のような当時の最高レベルの学者たちから長期間個人指導を受けることで、学校教育を受けられなかつた損失を埋めることができたのであ

る。

このように、洪命憲と洪起文は、修学過程こそ異なれ、漢文を深く修めたその上に新学問を学び、生涯にわたつて多方面の読書をつづけた結果、東洋の伝統文化と西洋の近代文化にともに精通する文人・学者となつた。もちろん洪命憲に比べれば洪起文は、学校教育をまともに受けていないうえ留学時代の読書量も貧弱で、西洋と日本の近代学問にさほど幅ひろく接することはできなかった。その点では、新世代である洪起文よりも父の洪命憲のほうがむしろ近代文学と学問に精通していたといえる。しかし一方で、十代のときに集中的に漢学を修めた洪起文は、その世代の人間としてたぐいまれな学問的実力を持つようになり、そのおかげで後日国学者として独歩の地位を築くことができたのである。

#### 4. 思想——民族主義と社会主義

洪命憲が明確な民族意識を持つようになったのは、1906年から1910年初めにかけての日本留学時代からである。ちょうど日露戦争に勝利し、朝鮮の植民地化によって野望を露わにしてきた日本の首都で、朝鮮人への差別を皮膚で感じながら生活するあいだに、洪命憲は帝國主義侵略の本質をはつきり認識して反日感情を内面化するようになった。

そのうえ帰国後の1910年庚戌国恥（日韓併合）と父の洪範植の殉国は、洪命憲の人生に決定的な影響をあたえた。自決のさいに息子の命憲に残した遺書で、洪範植は、「お前たちはなんとしても朝鮮人としての義務と道理を尽くして失われた祖国を取り戻さねばならぬ。たとえ死んでも親日（訳注：対日協力）はせず、のちのちまで私の名誉を傷つけるようなことをしてはならない」と命じた。洪命憲は父のこの遺言を深く胸にきざみ、一生座右の銘とした<sup>13</sup>。

洪命憲は父の三年喪を終えて出国し、上海で同済社に入るなど海外独立運動に投身した。そして帰国後の1919年3・1運動のときには槐山の万歳示威を主導して投獄され、1927年には左右の分裂を克服して民族運動の統合をめざした民族協同戦線、新幹会を結成し、主導的な活

動をおこなってふたたび投獄された。解放後は、南北分断の固定化をふせぎ、民族統一政府を樹立しようと民主独立党を結成して、1948年の南北連席会議の実現に重要な役割をはたした。洪命憲がつねに民族の解放と統一と独立のために、もっとも正しいと思われる路線に沿って積極的に活動したのは、父の遺志を受け継ごうという愛国の衷情からであった。

ところで、洪命憲は1920年代の初めから社会主義に関心をいだき、一時は社会主義運動団体に入って活動している。洪命憲は、当時いろいろあった朝鮮の社会主義運動のセクトのうちの火曜会に入っており、一時は朝鮮共産党の秘密黨員であったという説もある。しかし、かれが社会主義運動に関心をいだいたのは、どこまでも民族解放の一手段としてであった。洪命憲は思想的には、左右の対立を止揚する民族統一戦線路線を堅持したと見られる。彼は全世界の被支配階級の解放をもとめる社会主義の理想を人類の究極的な目標とみなしたけれども、その道程にある民族の解放と統一と独立を最優先の当面課題とし、一生涯そのための努力をつづけた。こうした彼の政治路線をあえて名づけるなら「進歩的民族主義」と呼ぶのがふさわしいだろう。

祖父洪範植の殉国は、洪起文にも生涯にわたって大きな影響をおよぼした。嫡孫の起文に残した遺書に洪範植は、「立身し名を揚げて遺恨をはらしてくれ」と書き残したという<sup>14</sup>。洪命憲に残した遺書から推して、親日行為をせず国を取り戻せという遺言も、もちろん入っていたことだろう。洪命憲は息子を薫陶するときはずねに祖父洪範植の最後を語りながら、このような殉国の烈士の後裔であるからには、自尊心と忍耐力を持たねばならぬと教え諭した。祖父が殉国したとき、洪起文はまだ物心のつかない子供だったが、祖父の遺言はやがて洪起文が民族運動家かつ国学者となるにあたって大きな影響を与えたはずだ。

1919年、父の洪命憲をはじめ、叔父、父の叔父など一族の中心人物がすべて槐山万歳示威運動に参加して投獄されると、当時感受性のするどい十代の少年だった洪起文は極度の衝撃を受けた。彼がはっきりした民族意識を持って国

語研究をはじめようになったのは、この時からであった。

中国に留学した洪起文はそこで孫文の影響を受けて、本格的に近代的民族主義思想を受け容れた。そこに中国国民党と中国共産党の第1次国共合作が成立し、政治的激変期をへながら彼ははだいに社会主義思想に傾倒していった。そして日本留学時代には在日朝鮮人留学生たちの組織する社会主義運動団体の一月会と東京無産青年同盟会に入って積極的に活動した。

当時たくさんあった朝鮮の社会主義運動の党派のなかでは一月会に属し、青年らしい血気によっていっそう急進的な社会主義者となった洪起文は、火曜会の幹部で比較的穩健であった洪命憲に対して微妙な葛藤をおぼえるようになった。そのため東京留学時代の洪起文は父親にたびたび手紙を送っては、自分のことを自慢したり、父を攻撃をしたりしたという。

だが、火曜会と一月会が社会主義思想団体の統一をめざして正友会となって出帆すると、二人はともに正友会に所属して活動し、やがて正友会が非妥協的民族主義者たちと手を組み、新幹会が結成されると、二人はいっしょに活動するようになった。新幹会の創立準備の過程で主導的な役割をはたした洪命憲の指示をうけて、洪起文は綱領と規約の作成など具体的な準備作業をおこなった。そして新幹会の本部の幹部であった洪命憲とはべつに、新幹会の京城支部の幹部として積極的に活動をおこなった。

1945年の解放ののち、洪起文は父の洪命憲がつくった中間派の政党である民主独立党に参加して活動した。彼は民主独立党の創党大会で宣言と綱領の朗読をおこない、その後は民主独立党ソウル市地区党幹部として活動した。民主独立党の創党式に出た漢学者李九榮のユーモアをまじえた回顧談によると、当時洪命憲と洪起文は親子ともども頭が禿げており、壇上を行ったり来たりする様子は、「ちょっと見ると、どっちがどっちか、区別が難しかった」という。

越北直後、1948年9月に朝鮮民主主義人民共和国政府が樹立すると、洪命憲と洪起文はともに民主独立党所属として朝鮮最高人民会議代議員に選出された。このとき洪命憲は副首相に選ばれ、第2期内閣でもつづけて選出された。

1962年には朝鮮最高人民会議常任委員会副委員長となり、亡くなるまでその職にあった。また、洪命燾は1961年に設置された南北統一と対南問題専担機構祖国平和統一委員会の初代委員長としても活動した。

1968年に洪命燾が死亡すると、洪起文は父のあとを継いで朝鮮最高人民会議常設会議の副議長<sup>15</sup>、および祖国平和統一委員会の副委員長を務めた。洪命燾と洪起文は北で最後まで粛清されずに高位職にとどまったが、この二人はあくまでも民族主義者であり、北朝鮮政権が標榜した民族統一戦線を象徴する人物として扱われたといえる。それで実際の権力からは遠ざかっていたために、権力闘争に巻き込まれずにすんだと推測される。

このように、洪起文は進歩的民族主義者であった父の思想的な同志であり後継者としての生涯をおくった。先に言及したように、洪起文は社会主義運動に身を投じていた青年期には思想的に父よりも急進的であった。しかし1930年代の初めに新幹会が解散し、彼自身が朝鮮日報社に入社して言論と学術活動に専念するようになってからは、むしろ父より穏健な人物となっていったようである。それで解放後に社会主義運動をしながら洪命燾・洪起文父子と頻繁に接触していた李九榮は、「あの家は息子より父親の方が徹底していて進歩的だと評されていた」と回顧している<sup>16</sup>。

## 5. 文学と学問

周知の通り、洪命燾は韓国近代文学史上記念碑的な傑作である歴史小説『林巨正』を書いた作家である。『林巨正』は日本植民地時代に発表された韓国の歴史小説中もっとも規模が大きな大河小説であり、現在韓国の四季節出版社から全10巻で刊行されている。この作品は韓国近代の歴史小説の草創期にあたる1928年に『朝鮮日報』で連載が始まり、その後何回か中断を繰り返しながら1940年まで、10年あまり連載された<sup>17</sup>。

『林巨正』は、李朝時代の中期に実在して『朝鮮王朝実録』にも名前が載っている火賊の頭領林巨正の活躍を描いた作品である。1920年か

ら30年代はもちろん、今日にいたるまで、韓国の歴史小説は王侯貴族を主人公として封建支配層の視点で歴史を描く、王朝史中心の歴史小説が主流をなしている。ところがこれとは違って『林巨正』は賤民である白丁出身の盗賊林巨正を主人公として、民衆の動きを通して歴史を把握しようとする民衆史観がはっきりと現れた作品である。

このような特徴とあわせて注目されるのは、洪命燾が『林巨正』を描きながら常に、「朝鮮情調で一貫した作品」を書こうと留意していた点である。1930年初めに連載を再開したときに書いた「作家の言葉」で洪命燾は次のように述べている。

(…)私がこの小説を最初に書き始めたとき、一つ決心したことがあります。朝鮮文学というと、昔のものはほとんど支那文学の影響を受けて事件やこめられた情調が我々とは遊離することが多く、また最近の文学ではヨーロッパ文学の影響を受けて洋臭があります。それで私は、『林巨正』だけは、事件も描写も情調もすべて、それこそ服一枚といえども他人から借りずに純朝鮮製に作ろうと考えました。「朝鮮情調で一貫した作品」、これが私の目標でした。<sup>18</sup>

この意図にしたがって『林巨正』は近代的なリアリズム小説でありながら物語風の文体を取り、ユーモアたどよう昔話の一節を聞くような、懐かしい感じを与える。そして民話や伝説が適切に挿入されて興味をかきたて、冠婚葬祭、季節おりおりの風習、巫俗など、朝鮮時代の風俗が多彩に描写されている。また、漢文風ではない朝鮮固有の人名や地名、土俗的な古語とことわざが豊富に活用されている。

この結果、『林巨正』は下層民衆の生活を中心とする民族共同体の美しい伝統を積極的に再現することで、民族文学的な個性をみごとに持った作品となった。特に『林巨正』は朝鮮伝来の風俗と言語を豊富にまた正確に駆使している点で、韓国の他の作家や作品の追随を許さないが、そうした芸術的な成果は洪命燾がその方面に抜きん出た造詣と関心を持っていたからこそ可能だったのである。

洪命憲は作家として有名であるが、一方では当時最高レベルの学者という一面も持っていた。とりわけ彼は言語と風俗史分野に格別の関心と造詣を持っていた。『林巨正』を見れば分かるように、朝鮮の固有語と漢字語、古語等についての該博な知識を持ち、日本留学と中国・南洋時代に日本語はもちろんロシア語・中国語・エスペラント・英語など、多様な外国語を学んでいる。言語に対する洪命憲の幅広い知識は『東亜日報』に連載したコラムを集めて出版した著書『学窓散話』にある、「言語の分類」「標準語」「正音」「満州語」「国際語」「語源と史実」などの項目にもよくあらわれている<sup>19</sup>。

李朝末の兩班の嫡男として生まれ、奴婢まで入れると数十名という大家族のなかで成長し、漢籍をたゆまず読んでいた洪命憲は、朝鮮伝来の風俗に関する該博な知識を持っていた。伝統文化に関する関心と造詣は、1936年、『朝鮮日報』に一時連載したコラム『養痾雜録』と『温故瑣録』によくあらわれている<sup>20</sup>。これらのコラムで洪命憲は「陰曆」「嫡庶」「兩班」「秘密稷」など、おもに朝鮮の伝統文化を紹介して、その由来と変遷史を述べている。

このように、洪命憲は『林巨正』の作家であるだけでなく、朝鮮の言語、文化、歴史、風俗に精通した学者としての一面も持っていた。北に行ったのちに彼が北朝鮮の学界を代表する朝鮮民主主義人民共和国科学院の初代院長に選任されたのは、学者としての水準と力量が認められたためといえる。

一方、洪起文は、日本留学を中断して帰国した直後、一時カップ（KAPF、朝鮮プロレタリア芸術同盟）所属の文学評論家として活動した。カップがはじめて対外的に存在を明らかにした1926年12月の臨時総会に関する記事を見ると、当時22名のカップ盟員名簿に洪起文の名前が入っている。また、その年の末にはカップ機関紙にあたる文芸運動社主宰の文芸大講演会で、朴英熙、金基鎮、趙明熙らとともに講演もしており、翌年には、民族主義文学陣営の論客である廉想渉を批判する評論を『朝鮮之光』に発表して、論争を繰り広げた<sup>21</sup>。

だが、その後の彼は父の学者的な資質と学問世界を継承して、おもに国学者として多くの業

績をあげた。1930年代には朝鮮日報社に在職しながら『朝鮮日報』紙面を通して草創期の国語学発展に寄与する論文を発表しつづけ、これを土台にして解放後に『正音發達史』と『朝鮮文法研究』を刊行した。そのほかに彼は、『朴燕淑の芸術と思想』『歴史学の研究』など、国文学と国史学分野でも注目すべき論文を数多く発表している。越北したのちは、北朝鮮の語文政策に深くかかわりながら、『郷歌解釈』『吏讀研究』『朝鮮語歴史文法』など、国語学の分野で重要な著作を多く残した<sup>22</sup>。

洪起文も父と同様、朝鮮の風俗について格別な関心と造詣を持っていた。彼は1937年から翌年にかけて『朝鮮日報』に、父の『養痾雜録』と『温故瑣録』につづく『雜記帳』と『小文庫』というタイトルで、朝鮮の伝統文化を紹介するコラムを連載し、解放後はこれを『朝鮮文化叢話』という単行本にして出版した<sup>23</sup>。ところで『小文庫』のうちの多くには『趨庭録』という副題がついている。「生前の父の言行を記録した本」という意味の副題が表しているように、これらの文は彼が洪命憲から聞いた内容を整理して紹介したものだ。「趨庭録」で特に大きな比重がかけられているのは、朝鮮固有の衣服と婚姻制度に関する項目で、衣服と婚姻の風俗は『林巨正』のいたるところで格別な比重を持って描写されているものでもある<sup>24</sup>。

洪起文が学者として本格的に研究活動をした1930年代以降になると、洪命憲が洪起文に意見を求めることもあったようである。金南天が自分の創作にかかわる後日談を書いた『作男・下男その他』を見ると、次のような一節がある。

いま我々が有している文芸作品のうち、語彙がもっとも多いことでは誰もが洪命憲氏の『林巨正』をあげるが、その洪命憲氏が、洪起文氏に『作男』と『下男』について尋ねたという。洪起文氏は方言を研究しているだけでなく社会史や土地問題についても造詣が深いので、もちろんその言葉をよく知っていたが、大部分の読者はこれがいかなる語彙であるかを知らないのではないか<sup>25</sup>。

金南天の長編小説『大河』には平安道の農村

の独特な雇用制度である「作男」(절계)と「下男」(막서리)という単語が出てくるのだが、洪命憲が国語学者である息子洪起文にどういう意味だと尋ねたというのである。このことから、洪命憲と洪起文はおたがいに言語と風俗に関する知識の交換などもしていたことが推測される。

このように、洪命憲はおもに創作を通して、洪起文は学術を通して、朝鮮の言語と風俗を探求することで「朝鮮情調」を追求しようとしたわけである。特に新幹会が解散した1930年代以降は民族運動が難しくなり、文学と学問を通して「朝鮮情調」を追求することが消極的とはいえ民族意識の保全に寄与しうる方法であった。そしてこれは殉国烈士である洪範植の息子と孫として、彼の志を受け継ぐ道でもあった。

洪起文は父の洪命憲と同様、正規の道をあゆんで学界の一員となった正統的な学者とは距離があった。彼は大学に行くことができず、学会に参加せず、在野の学者として一人で研究をつづけた。そのうえ、「世間と家の問題に翻弄されず、20歳前のころのようにひたすら学問の道に精力を傾倒しておれば、その成就するところは今日の程度にとどまらなかったものを」<sup>26</sup>と『朝鮮文法研究』序文で残念がった父の言葉通り、洪起文はなかなか学問に専念することができない条件のなかで研究を続けた。だが一方で彼は、朝鮮日報社会学部に長いあいだ勤務した関係上、ジャーナリズムを通して自分の論文を発表しつづけて大衆化できるという利点を持っていた。

解放後、ソウル新聞社と合同通信社に身をおきながらいくつかの大学に出講していた洪起文は、1948年に越北してのち、ようやく正式に大学のポストを得た。彼は金日成総合大学の副教授となり、『郷歌解釈』と『吏讀研究』により、北朝鮮で最初の国語学博士の学位を得た。そして、のちに科学院院長をへて、父につづいて社会科学院副院長となり、北朝鮮の人文・社会科学界をひきいる位置に立つことになった。また末年の洪起文は北朝鮮が国家的な事業として推進した『李朝実録』翻訳事業も主導した。

洪命憲と洪起文が学者として類似した学問的見解を持っていた事実は、歴史学の論文である洪命憲の「鄭圃隱と歴史性」と洪起文の「麗末

の兩班階級生成と鄭圃隱の活動」を比較してみれば分かる。1938年に圃隱鄭夢周生誕六百周年を記念して刊行された『朝光』誌の特別付録と、『朝鮮日報』とにそれぞれ発表した論文で、二人はともに高麗朝の中心圃隱の「志操」と「礼義」を賞賛しながら、彼を兩班階級の鑑として高く評価している<sup>27</sup>。

また洪起文は1937年に発表した燕巖朴趾源の生誕二百周年の記念論文「朴燕巖の芸術と思想」で、朝鮮後期の実学者であり文人であった燕巖の作品は漢文で書かれてはいても朝鮮文学の個性が濃厚に表れている点を高く評価している。同じころ洪命憲は兪鎮午との対談で、燕巖は唐宋の古文の規則に縛られず漢文によって「言いたい内容を心のままに表した」のであり、燕巖の文章には「朝鮮情調」があると高く評価した<sup>28</sup>。これを見ると、洪起文の論文は父の洪命憲の教示を大幅に受け容れて執筆したと見て差し支えなさそうである。

〔付記〕翻訳にあたり、早稲田大学国際教養学部の布袋敏博教授からご協力を賜った。この場を借りてお礼を申し上げる。

<sup>1</sup> 姜玲珠、『碧初洪命憲研究』、創作と批評社、1999。

姜玲珠、『碧初洪命憲評伝』、四季節、2004。

姜玲珠、『国学者洪起文』、『歴史批評』2004年秋号。

林榮澤・姜玲珠編、『碧初洪命憲と「林巨正」の研究資料』、四季節、1996（以下『碧初資料』と略称）。〔特記のないものは発行所はソウル—訳者〕

<sup>2</sup> 閔忠煥、『「林巨正」と洪錫中の小説に現れた朝鮮語』、第9回洪命憲文学祭学術講演要旨、〔清州〕、2004.10。

<sup>3</sup> 洪命憲の生家である槐山仁山里の古家は、十余年前、筆者が『碧初洪命憲研究』の前書きで初めて考証したのち各界で保全運動が起り、文化財（忠清北道民俗資料第14号）に指定されて、現在は復元工事をおこなっている。



- <sup>4</sup> 洪命憲、「洪起文『朝鮮文法研究』序」、『碧初資料』p.63。「満」による年齢計算では誕生後1年たって満1歳となるが、韓国で一般的な「かぞえ」による年齢計算は、誕生すれば1歳、初めて正月を迎えたときに2歳となる。したがって、洪命憲はかぞえ年13歳で結婚し、16歳のときに長男起文が生まれたことになる。
- <sup>5</sup> 洪起文、「息子から見た父」、『朝光』1936.5（『碧初資料』、pp.232-233）。
- <sup>6</sup> 「百人百話」、『開闢』1935.1、p.98。
- <sup>7</sup> 申采浩が洪命憲よりも8歳年長であったが、申采浩が本格的な近代小説作家であるかに関しては学者によって論難の余地があろう。金允植・鄭豪雄共著『韓国小説史』（芸河、1993、p.637）の末尾に収録されている韓国近代小説史年表の最初の行には「1892年、李光洙出生（1888年、洪命憲出生）」とある。洪命憲を括弧に入れた理由を知りたいところである。
- <sup>8</sup> 洪命憲、「沈熏『常緑樹』序」、『常緑樹』、沈熏著、朝鮮図書株式会社、1936（『碧初資料』p.53）。  
洪起文、「故沈熏氏の遺作『織女星』を読んで」、『朝鮮日報』1937年10月9日付。（洪起文『朝鮮文化論選集』、金榮福・丁海廉編、現代実学社、1997、p.350；以下『洪起文選集』と略称）。
- <sup>9</sup> 洪命憲は民族的鬱憤のために、退学を覚悟で5年生の3学期には学校に行かず、卒業試験も受けないうまま帰国してしまった。しかし大成中学校では平素の成績が良いということで卒業証書を送ってきた。当時大成中学校では点数と成績を一覧表に記載せずに卒業させる「特別卒業」という制度があり、洪命憲はこの制度のおかげで卒業できたと推測される。（『碧初洪命憲研究』、pp.66-73；波田野節子、「東京留学時代の洪命憲」、『忠北文学』〔清州〕、2003年秋号、p.199）。
- <sup>10</sup> 李基炯は「人傑を生んだ山水の芸術—碧初洪命憲の生家を訪ねて」（『碧初洪命憲「林巨正」の再照明』、四季節、1988、p.241）で、洪命憲と弟の洪性憲も息子の洪起文もみんな反日感情のために学校に通っていないとしているが、じつは洪起文だけが国内で就学しなかつた。
- <sup>11</sup> アルフォンス・ドーデの短編小説「最後の授業」は、普仏戦争でフランスのアルザス地方がプロシア軍に占領されてフランス語使用が禁止されたとき、ある教師がフランス語の最後の授業をしながら国語の重要性を力説して学生たちに感動を与える話で、民族の生存のために国語を保存しなくてはならないという教訓を含んでいる。
- <sup>12</sup> 「文筆家一覧表」、『朝光』1940.1、p.391。当時、洪起文は『朝光』誌を出していた朝鮮日報社に勤務していたので、この学歴事項は洪起文自身が直接書いたものと推測される。「海外で自習」という特異な表現は、そのころ日本留学から帰国して大きな顔をしていた実力のない大学卒業者たちに対する若干の風刺をこめた表現ではないかと思われる。
- <sup>13</sup> 鄭寅普、「錦山郡守洪公事状」、『澹園鄭寅普全集』、第5巻、延世大学校出版部、1983、p.9。玄勝傑〔音訳〕、「統一の念願に対する逸話」、『統一藝術』創刊号、光州、1990、p.319。
- <sup>14</sup> 洪起文、「故園紀行」、『洪起文選集』、p.380。
- <sup>15</sup> 1972年12月に出帆した第5期最高人民会議からは従前の常任委員会が常設会議に代わっており、洪起文は第5期と第6期（1972～82）常設会議副議長であった。
- <sup>16</sup> 沈之淵、『歴史は南北を問わない—激浪の現代史を全身で生きてきた老村李九榮先生の八十年の物語』、ソナム、2001、p.266。
- <sup>17</sup> 洪命憲、「林巨正」、『朝鮮日報』1928年11月21日～1939年7月4日；『朝光』1940年10月号。  
洪命憲、『林巨正』全10巻、第3版、四季節出版社。
- <sup>18</sup> 洪命憲、「『林巨正』を書きながら」、『三千里』1933.9。（『碧初資料』、p.39）。
- <sup>19</sup> 洪命憲、「学窓散話」、朝鮮図書株式会社、1926、pp.107-123。（『碧初資料』、pp.99-107）。
- <sup>20</sup> 洪命憲、『養痾雑録』、『朝鮮日報』1936年2月13日～26日付。  
洪命憲、『温故瑣録』、『朝鮮日報』1936年4月18日付、21日付。  
「養痾雑録」とは療養中に書いた雑多な記録という意味であり、「温故瑣録」とは昔のこ

とに親しみながら書いたつまらぬ記録という  
意味である。

<sup>21</sup> 『内外日報』、1926年12月26日付。  
『朝鮮日報』、1926年12月18日付。  
洪起文、「廉想涉君の反動的思想に反駁する」、  
『朝鮮之光』1927.2、pp.37-43。

<sup>22</sup> 洪起文、『正音発達史』上・下、ソウル新聞社、  
1946。

洪起文、『郷歌解釈』、科学院出版社、〔ピョ  
ンヤン〕、1956。

洪起文、『吏讀研究』、科学院出版社、〔ピョ  
ンヤン〕、1957。

洪起文、『朝鮮語歴史文法』、社会科学院出版  
社、〔ピョンヤン〕、1966。

<sup>23</sup> 袋山生、「雑記帳」、『朝鮮日報』1937年10  
月1日～11月18日付。

袋山生、「小文庫」、『朝鮮日報』1938年1月  
11日～3月19日付（うち「趣庭録」は1938  
年1月13日～2月15日付）。

洪起文、『朝鮮文化叢話』、正音社、1946。

広範な読書にもとづいて多方面にわたる知  
識を新聞・雑誌に紹介する現代的なコラムの  
形式は韓国では洪命慈がはじめて開拓したも  
ので、洪起文の『朝鮮文化叢話』はその内容  
と形式の両面において洪命慈の『学窓散話』  
を継承したものといえる。

<sup>24</sup> 朝鮮の衣服と婚姻制度に関する論議は、洪命  
慈の娘であり、洪起文の妹である洪妹瓊と洪  
茂瓊姉妹の論文でいっそう本格的に展開され  
ている。双子である洪妹瓊と洪茂瓊は1941  
年末に同時に梨花女子大専門部専科を卒業し  
たが、父の丁寧な指導を受けてそれぞれ「わ  
が国の衣服制度に関する研究」「朝鮮の婚姻  
制度の歴史的考察」というタイトルの卒業論  
文を書いた。これは解放後に『朝鮮の衣服・  
婚姻制度の研究』（乙酉文化社、1948）とい  
うタイトルの共著として出版された。

<sup>25</sup> 鄭豪雄・孫禎秀 編、『金南天全集』1、パギョ  
ン、2000、p.482。

<sup>26</sup> 洪命慈、「『朝鮮文法研究』序」、〔碧初資料〕、  
p.63。

<sup>27</sup> 洪命慈、「鄭圃隠と歴史性」、〔圃隠鄭夢周生  
誕600年記念誌〕、『朝光』、1938年1月号別  
冊付録。

洪起文、「麗末の両班階級生成と鄭圃隠の活  
動」、『朝鮮日報』1938年1月23日付。

<sup>28</sup> 洪起文、「朴燕滋の芸術と思想」、『朝鮮日報』  
1937年7月27日～8月1日付。（『洪起文選  
集』、pp.303-316）。

洪命慈・兪鎮午対談、「朝鮮文学の伝統と古  
典」、『朝鮮日報』1937年7月16日～18日付。  
（『碧初資料』、pp.164-171）。